

平成 28 年 10 月吉日

PTA・後援会会員のみなさま

埼玉県立浦和西高等学校
後援会会長 田口 均
校 長 高野 能弘

平成 28 年度「よりみち西高（講）座」ご案内
第 3 回 よりみち防災講座
～ 西高で防災を考える ～

近年、地震・台風・豪雨・噴火など大規模な自然災害がつづいています。なかでも 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の記憶は、復興の道半ばということもあり、生々しいものがあります。こうしたなか、今回のよりみち西高（講）座では、「映像による学び」と「防災食についての学び」を二本柱に、私たちの防災意識を高めることを目指しています。

■日時および場所＝2016 年 11 月 26 日（土）13:00～18:00、西高記念館 M1

■講座内容

□第一部 13:00～15:00

①映像を通じた学び

「第 65 回 全国高等学校 PTA 連合会大会 岩手大会特別第 2 分科会

防災教育・復興教育～「防災教育」・「復興教育」の推進について～」（上映時間＝1 時間 41 分）

岩手県における東日本大震災の災害対応指揮官、町人口の 1 割が避難してきた高校の副校長、子どもたちの日常生活の回復に奮闘した PTA 会長、町長はじめ多数の職員を失った町幹部職員、防災教育「津波てんでんこ」を実践した元中学校教諭——それぞれが語る防災・復興教育。

※裏面「講師・パネリストのプロフィール・講演概要」も参照ください。

□第二部 15:30～18:00

②西高の防災対策について

1) 西高の防災対策の現状（遠井教頭先生） 2) 西高の防災施設見学（板崎先生）

③専門家による講義と防災食を食べながらの懇話会

講師＝別府 茂氏

（日本災害食学会副会長、ホリカフーズ株式会社取締役、新潟大学大学院客員教授、博士（歯学））

■募集人数＝60 人

■申し込み方法

参加申込／メールにて受付します 〆切り／11 月 20 日（日）

送付先／nyor imichi2016@gmail.com 件名／防災講座申し込み

本文／①所属（学年クラス。後援会の方は後援会と記入）、②氏名、

③連絡先（携帯番号。当日連絡用に必要ですので、なるべくお書きください）

問い合わせ先：後援会 田口 上記メールアドレスないし 080-1296-4717 にて承ります。

※長丁場となりますので、途中の出入り自由とします。

※PTA・後援会会員だけでなく、教職員のみなさまの参加をお待ちしております。。

「第 65 回 全国高等学校 PTA 連合会大会 岩手大会特別第 2 分科会
防災教育・復興教育～「防災教育」・「復興教育」の推進について～」
講師・パネリストのプロフィールと発言概要

【講師／コーディネーター】

◎越野修三（岩手大学地域防災研究センター教授）

阪神・淡路大震災では陸上自衛隊第 13 師団作戦部長として、東日本大震災では岩手県防災危機管理監として、災害対応の指揮にあたった。

危機管理の視点から東日本大震災時の対応を検証し、今後の防災教育・復興教育に生かす道筋を述べる。

【講師／パネリスト】

◎横田昭彦（岩手県立高田高等学校校長）

震災当時は岩手県立山田高校副校長。山田町の高台にある同校には、市内での大火災の発生もあり、町民の 1 割近くにあたる 1300 人が避難した。また。隣接する陸前高田市にある高田高校は、津波により校舎が全壊している。

学校現場で何がおこり、そしてどのように行動したのか、そして、現在岩手県で行なわれている防災教育・復興教育について語る。

【パネリスト】

◎熊谷栄明（宮城県気仙沼高等学校元 PTA 会長）

震災当時は宮城県気仙沼高校 PTA 会長。震災による学校の被害はなかったが、避難してきた近隣住民を武道場に受け入れた。その対応を積極的に行なったのが子どもたちである。子どもたちが日常の暮らしを取り戻すにはどうしたらよいか、そのために PTA は何をしたのか。当時を振り返る。

◎平野公三（前岩手県大槌町会計管理者）

震災当時は大槌町総務主幹。大槌町では庁舎が津波に呑み込まれ町長ほか職員数十人が消息をたち、行政機能が麻痺した。震災による死者は 1233 人、当時の人口は 15277 人（2010 年）である。

多数の職場の仲間を亡くした町幹部職員として、震災からの 4 年半をどんな思いで過ごしたのか、そして何をしてきたのかを語る。

◎森本晋也（岩手県教育委員会事務局学校教育室学力・復興教育担当主任指導主事）

岩手県釜石市は津波による小中学生の死者がほぼゼロ。「津波てんでんこ」のおかげだという。森本氏はかつて同市東中学校教諭として防災教育に携わった。

「釜石の奇跡」の背景にあった防災教育の積み重ね、防災教育をうけた子どもたちが震災時にどう行動したか、そして今後の防災教育・復興教育のあり方を語る。